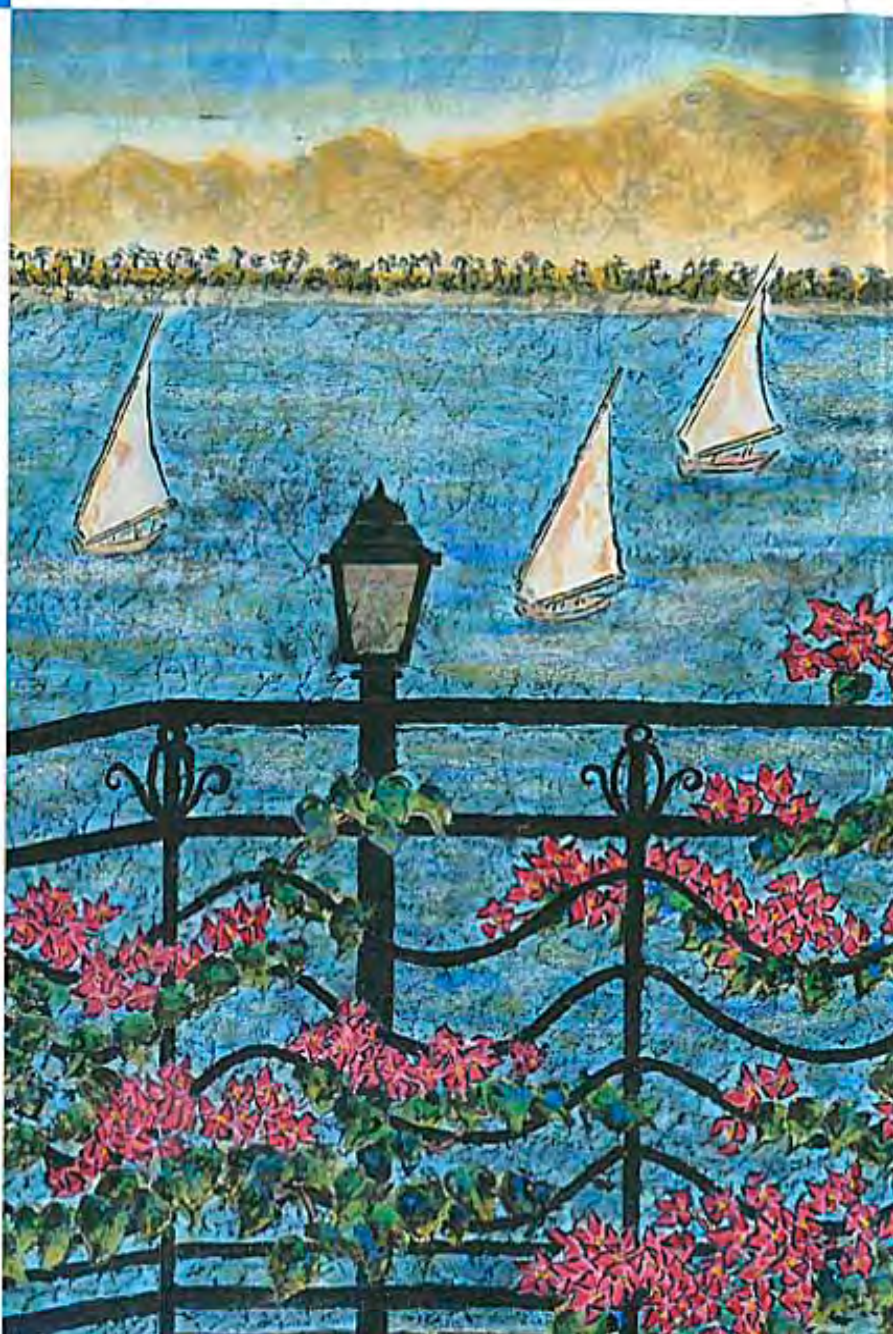


沖

8  
2016

俳句雑誌【おき】



# 上総

能村 研三

## 口能登周遊

先日、十一月に開催される「北陸勉強会」の下見打ち合わせで、プロジェクトチームの福島茂さん、阿部真佐朗さんとともに口能登を訪ねた。

昨年開通した北陸新幹線「かがやき」で東京駅を出発、長野の次が富山、金沢と交通も便利になった。

金沢駅には地元の中津正克さんが車で出迎えてくれ、勉強会の当日講演をお願いする、金沢の俳人宮田勝さんが勤務する金沢市内の病院を訪れ、講演のお願いにあがった。

車は内灘から千里浜海岸を通り先師登四郎の句碑がある羽咋へ走った。

月明に我立つ他は霽草

この句碑は、今から十年前の平成十八年三月に建立されたもので、先師の最晩年の作品であることから、本人が揮毫されものがなく、書家の那須大卿氏に揮毫をお願いした。能登一ノ宮である氣多大社の別当寺で

炎帝が治むるがよし東京都

縄文の錆もて梅雨の左近詩碑

若竹の撓ふに任せいすみ線

上総みな青嶺といへど高からず

古机の裏に戯れ書き安居寺

早暁のサーファーひとり波無尽

懇ろな箒目梅雨の恋文碑

槇の空裸足詣りのひと巡り

御祓して蔵伝承のころざし

仕込み蔵天窓に洩る梅雨明り

ある正覺院の境内に建立されている。氣多大社には、先師が敬愛した折口信夫の歌碑も建立されている。ここからは日本海の潮騒も聞こえてくる。この氣多大社には、「奇祭」の異名を持つ「鶴祭」という祭がある。毎年十二月十六日の深夜三時より行われるこの祭は、神前に放たれた鶴の動きで次の年の吉凶を占うというものだ。この鶴は七尾の鶴浦で捕えたものを三日かけて氣多大社に奉納するもので、この道すがらを「鶴様道中」と呼んでいる。

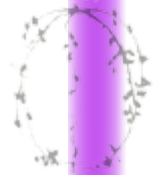
勉強会では中津さんの特別な計らいで、鶴様道中の鶴が泊まる宿と知られている、中能登町の良川地頭・鶴家様方を訪れる予定である。この祭が開催される冬に一度訪れたいと思う。

今回の勉強会は和倉温泉の美湾荘に宿をとるが、七尾湾や能登島が一望できる宿で、先師の句碑のある弁天島公園が近くにある。

春潮の遠鳴る能登を母郷とす

この句碑は「沖」の創刊三十周年を記念して平成十二年五月に建立されたもので、先師はこの建立除幕に列席したが、この旅が生涯の最後の旅となった。

# 蒼茫集



火星接近

林昭太郎

着信

安居正浩

朴一花咲いて定まる星の位置  
客を待つ暖簾・福助・水中花  
夜の薄暑ラー油に小さき匙浸し  
本陣取手宿行の屋根の量感みどり差す  
火星接近トマト畑にトマト熟れ  
蛇を打つ蛇の消えたる草も打つ

火を付けて見せ梅雨寒の蠟燭屋  
着信は二秒で返す青嵐  
甚平で今生に書く置手紙  
この町に生れ育ちて祭鯉  
ほたるぶくろ螢こぼしてしまひさう  
人間の匂ひまとひて梅雨籠り

残照

千田百里

青嶺

大畑善昭

窓開けやう泰山木の香を入れやう  
寂光や雨の泰山木の花生絹切る涼しくすべる帆を想ひ  
衣更へて武蔵原住民の裔  
封蠟宗左先生を偲びての紅の陰影パリ―祭  
江戸川の残照に佇ち端居めく

詩に集ふ誰も心に青嶺持ち  
心経のギヤーテーギヤーテー田蛙も  
しばらくは畳まず汗の法衣なる  
かはほりの稲妻型に翔ぶことよ  
熟れ切つて玉の肌を玉葱は  
豌豆のぱつちりの目の花ぞよき

おほきなひと 辻美奈子

青嵐おほきなひとに会ひにゆく  
白日傘羽ばたく音に開きけり  
寄つてたかつて浮輪より空気抜く  
向うより目玉近づく金魚玉  
父の日を一家総出で盛り上げる  
視線より低く鴉の通り朱夏

陣なごり 吉田政江

歌半吟行二句  
柿の花座敷かまどの陣なごり  
蜂一匹斉昭歌碑の近侍役  
チューリップ可笑しい時も涙出で  
蛇の衣評価はあとでついてきし  
糠床のうつぷんの熱抜く溽暑  
白南風や帆船の白立ち上がる  
トッカータとフーガ 荒井千佐代

病む姉を母と慕ひて杏の実  
紙魚走るちちの聖書のルカの章  
白扇を開くや師の句の立ち上がる

段差七寸 甲州千草

旧取手宿本陣三句  
主屋への段差七寸走り梅雨  
竹編みの空井戸の蓋藪蚊出づ  
寺に合ふ青葉曇の金物屋  
逝き給ふ山菜勢ふ水無月に  
輔・佐藤子種  
青嵐へ向けて乾したる柔道着  
梅雨明くる音清らかに皿割れて

江戸前の風 頓所友枝

六月や明月院は水のいろ  
江戸前の風に吹かるる小判草  
水買ふにいつしか慣れて芒種かな  
空梅雨や町から本屋また消えて  
五倍速の猫の一生籐寝椅子  
打水のための井戸あり佃島

師 恩 岡部玄治

朴咲くと酌まな師恩は忘るまじ  
噴水の樂しもすこし濡れてより  
相打つて涼しき音の玉鋼  
柿の花零る少女期過ぎやすく  
妣がりへをりをりひびく夜の風鈴  
穴子めし終の徳利とんと置き

しろがねの 大川ゆかり

グラノーラだけの朝食愛鳥日  
薫風や手も揃へたる正座の子  
白躑躅こころ寄り添ふやうに咲き  
青葉冷え検査着の母小さくて  
束ねたるしろがねの髪新樹光  
ほうたるの点滅星を増やすため

千筋の自在 藤原照子

腰かけて城址の礎石風薫る

白樺を唐松を焚き夏暖炉  
吊橋の出合ひや朴の花直視  
森の落款れんげつつじの名残咲き  
急かさる湖畔の目覚め行々子  
白糸の滝の千筋の自在かな

天気読む 楠原幹子

睡蓮の自若篠つく雨の中  
田植機のたちまち緋織り上ぐる  
本陣染野家畏みて墓  
降りみ降らずみ青柿の太りをり  
天気読むかやで虫の角を出し  
点滅の留守番電話水中花

玩具箱 細川洋子

山法師ひたと張り付く震度四  
永き日や仲見世といふ玩具箱  
夏風邪の雨意もつ人となりてをり

存外の粘着かたぎ草を取る  
しらじらと十葉の根の執念しや  
うすばかげろふ薄闇を皺ませり

父の威厳

内山照久

森林浴野鳥は森の聖歌隊  
太梁の黒光りして走り梅雨  
青梅や昔子供は丸坊主  
稜線を掴みて顕ちぬ雲の峰  
甚平や父の威厳に隙のでき  
口論に割つて入りたる時鳥

幫

間

広渡敬雄

掌に包み撫づる剃りあと朝ぐもり  
磁石へと砂鉄一閃みなみかぜ  
羽抜鶏三男坊によく懐き  
蟻集る媚葉を求め来るとし

幫間の向う鉢巻夏柳  
ゆらゆらと蟹の骸や天の川

母譲り

田所節子

滴りの鋼光りに岩を打つ  
緑蔭や研ぎ屋は水を携へて  
列島に断層混み合ひ青葉冷  
一張りごと宇宙のちがふキャンプかな  
トンネルの丸く切り抜く薄暑光  
姿見は母譲りなり更衣

喪支度

柴田近江

子等帰る茅花流しに唄乗せて  
梅雨の灯に吊る喪支度の五つ紋  
浦島草風の木洩れ日釣り逃がす  
田の神へ夕づつ招く河鹿笛  
紅ささぬひと日の緩む洗ひ飯  
百合蝶と化しパレードの鼓笛追ふ

# 潮鳴集



回 想

荒井千瑛子

回想の端に青春夏河原  
花ざくろ銃持て守る郵便所  
踏切の遠き瞬き梅雨に入る  
黒揚羽樹下憂愁を零しゆく  
蜘蛛の囿の待つてふ孤独雨上る

ノンアルコール

栗原公子

橋はみな色を違へて夏つばめ  
正座することなき暮し薔薇香る  
水中花ノンアルコールを酌み交はし  
おとうとはいつしか他人夏の月  
己が意で鳴つてみたかる風鈴よ

走 力

峰崎成規

取手吟行二句  
大利根は草の回廊行々子  
真つ直ぐは水戸つぽ気質鮎走る  
中心は淋しき居場所女郎蜘蛛  
尾の反りは早瀬の記憶鮎料理  
走力を溜むる蜥蜴の動かざる

天 竜

宮坂秋湖

露を煮るぐいと昔をたぐり寄せ  
天竜は母なる流れ青田波  
写経する芒種の雨の音のなか  
青梅や雨のしづくにふくらみて  
夜の網戸団樂の声透き通る





通し 梁 町山公孝

夏闇を湛へ陣屋の通し梁  
花なごり名札の並ぶ牡丹園  
応援歌ひびく葬送雲の峰  
腰笄にこぼるる実梅風渡る  
赤坂の地下にジャズバー明易し

朱夏の海 多田ユリ子

その先に朱夏の海あるジャズ喫茶  
きのふよりけふの波音更衣  
遠き世のやうな隠沼薬狩  
先づ星の巨きを称へ鮎の宿  
はは在す十年日記風入れす

掃く力 高木嘉久

浴衣の男降ろし両国駅閑か  
若竹に早くも雲を掃く力  
黒南風や裏堀長き動物園  
氷切る音は空耳街炎暑  
サングラス外してよりの長話

天地ぐらぐら 内山花葉

さざえ堂つつみ一山青葉騒  
二百年の根太や礎石や樟若葉  
螢火に触れさう近づけば水音  
駆け込んで白シヤツ石鹼の匂ひ  
天地ぐらぐらぐらぐらと藤の雨

中継中 七田文子

着陸すひなげしの原傾けて  
老幹はゴッホのタッチ夏つばめ  
揚ひばり少年野球の中継中  
誰もみな旬の時持ち花十葉  
単純な暮し常盤木落葉降り

海鳴りの崖 佐々木よし子

後戻りできぬ晩学かたつむり  
投げ技で決まる一本涼しかり  
円錐の列柱銀杏若葉して  
屋根裏の太梁うねる土間涼し  
鬼百合の海鳴りの崖掴み咲く

# 沖作品



レコードの針置くやうに五月来る  
わが生家消えたる跡の今年竹  
父母のぬし昔を今に豆の飯  
切り結ぶ宙に速さの夏つばめ  
蛸狩か細き道であればこそ  
字余りのジャズ花合歡の扉をひらく  
万緑の闇ゆたかなる水の音  
夏の星金米糖に角あまた  
六月の空より詩降る除幕式  
舞姫の疾走無音芒種かな  
燕子花ながれの緩む橋の下  
のど通る水の勢ひ子供の日  
サングラス世に抗はず従はず  
茶摘女の無造作といふ手際かな  
そら豆や肘つきて聞くつかぬ事

神奈川

大矢 恒彦

市川市

伊藤 朝海

千葉

坂本 徹

# 能村研三選

トンネルの行手にばつと新樹光  
大灘のきらめく一日袋掛  
月見草ゆつくり自転する地球  
せせらぎの音の澄み来る半夏生  
眼裏に師の影いく度緑の夜  
古新聞の時間括りて弥生尽  
葱坊主の一つ高きは先生か  
春風に乗りて真白きモノレル  
鬘屋の目無し人形春うれひ  
葛籠屋の葛籠干して夏近し  
太梁の黒きうねりや夏きざす  
茅葺きの軒の雫や苔青し  
緑蔭の人ら出で来る渡船来る  
まくなぎの群の無音を恐れけり  
鎖場をおほふ夏霧修験道

伊藤よし江

市川市

小川 流子

千葉

竹内タカミ

# 沖作品 15句選評

\*  
能村研三

レコードの針置くやうに五月来る 大矢 恒彦

インターネットの普及で、音楽を聴くにもいろいろな方法が出来るようになった。音楽の再生装置もCDに変わり、ユーチューブなどでも簡単に音楽を聴けるようになった。しかし、今団塊の世代の人たちの間では、もう一度アナログレコードに脚光が集まっており、レコードに親しんできた人たちが「青春時代の音」を懐かしんでいる。アナログの良さが見直されているからであろうか。特にレコードプレーヤーに針を置く瞬間の緊張感と感触は今でも忘れられない。このフレッシユな緊張感は五月という季節感ともびつたりと符合する。類想感の無い句である。

字余りのジャズ花合歓の扉をひらく 伊藤 朝海

次も音楽の句。俳句は五・七・五の十七文字が約束で、六・六・五とか五・五・七、七・五・五などの変則的な十七文字も

時には許容されるがリズムが問題となる。先師の〈春ひとり槍投げて槍に歩み寄る〉の句も中八の字余りの句で有名である。ジャズはクラシック音楽とは違って定型をいかにはみ出すかはその魅力にもつながる。作者はジャズを聴きながら俳句に励んでいたのだろうか。どう推敲しても字余りになってしまう俳句作りに悩みながら聴いたジャズ。ジャズでも変拍子があるではないか、五拍子とか七拍子とか、十一拍子なんてのもあるわけで、これはつまりは字余りなんじゃないかと思った。そんなことを思いつつ扉を開けたら合歓の花が綺麗に咲いていた。

サングラス世に抗はず 従はず 坂本 徹

世の中を生きていくには、何事にも大人しすぎたり、従順すぎてもいけない。またこれに反して何事にも逆らう姿勢もよくない。だとすると、その中庸が一番良いことになるのだが、自らの信念をしっかりと持ち、その場その場を流されることなく生きていけば良いのである。サングラスは、ある意味ではその両面の意味を備えているのかも知れない。サングラスをかける少し大胆な気持にもなる。

トンネルの行手にばつと新樹光 伊藤よし江

新緑の山々を縫ってドライブに出かけた。緑あふれる山々の景色を見ていたかと思うと突然トンネルに入り一瞬間に包まれ不安な気持になった。やがてその先に明が見えてくるとほっとする。トンネルを出た途端一瞬新樹光が射しこんできた。人間の心理を巧みに詠んだ句である。「ばつと」という擬態語が効いている。